

# 地域における子育て支援ボランティア養成の課題

～諫早市子育て支援サポーター養成講座受講生アンケートから～

Problems on Bringing Up Community Based Childcare Supporters

～ From the Results of a Questionnaire to Participants in the Childcare Training Program Sponsored by the City of Isahaya ～

入江詩子

Tomoko Irie

菅原良子

Yoshiko Sugawara

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

10巻1号

Bulletin of the Research Institute of Regional Area Study

Nagasaki Wesleyan University

2012年3月

## 地域における子育て支援ボランティア養成の課題\* ～諫早市子育て支援サポーター養成講座受講生アンケートから～

入江詩子\*\*、菅原良子\*\*

### Problems on Bringing Up Community Based Childcare Supporters

～ From the Results of a Questionnaire to Participants in the Childcare Training Program Sponsored by the City of Isahaya ～

Tomoko Irie, Yoshiko Sugawara

#### 概要

本稿では、2010年3月に実施した「諫早市子育て支援サポーター養成講座」受講生アンケートの結果を踏まえて、これからの地域における子育て支援ボランティア養成の課題を明らかにする。

「諫早市子育て支援サポーター養成講座」は、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所が、2004年度から2011年度まで、諫早市と連携して実施してきたものであり、2006年度からは少人数による参加型・体験型の講座とし、受講生の主体形成を促してきた<sup>1</sup>。

アンケートからは、受講生はこれまでの講座に概ね満足し、今後の講座に対しては多くの要望をもち、半数以上の回答者が実際に子育て支援にも関わっており、現場に反映できる多くのアイデアも持っているということが分かった。主体的学びによって成長する市民を、自治体が協働のパートナーとして、どのように地域づくりに活かしてゆくかが問われている。

**キーワード：**子育て支援、参加型学習、ボランティア、主体形成、子育て支援委員会

#### はじめに 子育て支援サポーターの必要性

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所は、2004年度から2011年度まで、諫早市と連携して「諫早市子育て支援サポーター養成講座」を実施してきた。講座では次年度に活かすために毎回事後アンケートを取り、その結果を踏まえて内容の改善を試みてきた。

2006年度からは、子育て支援の現場において受講生の能動的な動きを促すために、少人数による参加型・体験型の講座によって受講生の主体形成を図ってきた。

本稿のアンケート調査対象者は、本学が2004年

度から諫早市の委託を受けて実施してきた、「諫早市子育て支援サポーター養成講座」を受講した方々である。この講座は、諫早市が2003年7月に地域福祉の推進を目指して地域福祉計画である「いさはや健康と福祉のまちづくりプラン」を策定し、2004年度に厚生労働省から指定を受けた“子育て支援総合推進モデル市町村”としての、地域福祉計画の具体的実践として始まった。

モデル市町村の主要事業では、地域福祉に対する市民の共通認識・意思統一を図るために、「子ども」を中心において、「子どもの思い、親の責任、そして地域の役割」というテーマのもと、ふたつの事業が実施された。

ひとつは、「諫早市子育て支援セミナー」の開催であり、残りのひとつが、地域の子育て支援の中心となる人材を育成するための、「諫早市子育て支援サポーター養成講座」であった。本稿では、後者の養成講座受講生アンケートによる結果を中心に、子育て支援におけるボランティアの養成の課題について考察する。

#### 第1章 アンケート内容について

先述したとおり、地域子育て支援の中心となる人材を育成するために、本学が諫早市の委託を受けて2004年度より継続開催してきた「諫早市子育て支援サポーター養成講座」は、2009年度までに354名の受講生を生みだしてきた。そこで、彼らが現在、地域でどのような子育て支援活動に関わっているのかを確認するために、そして、その力が地域で活かされていないとすれば、どのような仕組みが必要であるかを明らかにするために、2011年3月にアンケート調査を実施した。なお、「諫早市子育て支援サポーター養成講座」の経緯や内容の詳細については、別途まとめている<sup>2</sup>。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

\* Received March 15, 2012

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

1. このアンケートにお答えいただく方についてお尋ねします。

年齢 ( 歳)

居住地区 ( 町)

就労の状況 どちらかを○で囲んでください

①就労していない(定年退職 専業主婦)

②就労している

(常勤 非常勤 パートタイム その他)

2. 子育て支援サポーター養成講座はいつ受講されましたか。複数受講された場合は全ての受講年に○をつけてください。

※各年度の講座内容に関しては別紙をご覧ください。

①2004(平成16)年度

②2005(平成17)年度

③2006(平成18)年度

④2007(平成19)年度

⑤2008(平成20)年度

⑥2009(平成21)年度

⑦2010(平成22)年度

3. 子育て支援サポーター養成講座を受けて今日のように思われていますか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

①とてもよかった

②よかった

③ふつう

④よくなかった

⑤全くよくなかった

4. 3で①②を選ばれた方におたずねします。どのような点がよかったですか。ご自由にお書き下さい。

5. 3で④⑤を選ばれた方におたずねします。どのような点がよくなかったですか。ご自由にお書き下さい。

6. 子育て支援サポーター養成講座は、地域での子育て支援の役に立ちましたか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

①とても役に立った

②まあ役に立った

③かわらない

④役に立たなかった

⑤まったく役に立たなかった

7. 6で①②を選ばれた方におたずねします。どんな点が役に立ちましたか。ご自由にお書き下さい。

8. 子育て支援のためにどのような講座があれば良いと思いますか。ご自由にお書き下さい。

9. 地域社会全体での子育て支援は必要だと思いますか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

①とても必要だと思う

②どちらかと言えば必要

③特に必要だとは思わない

④支援するべきではない

10. 現在何かの子育て支援をなさっていますか。該当するものをひとつ選んで○で囲み、具体的な内容を自由にお書き下さい。

①している(具体的な活動内容)

②していない(理由)

11. 子育て支援ボランティアへの報酬についてどのようにお考えですか。該当するものをひとつ選び、理由と①を選ばれた場合は、妥当な金額と内訳(時給〇〇円、交通費〇〇円など)をお書き下さい。

①あったほうがよい

理由 金額

②ないほうがよい

理由

③どちらでもよい。

12. 地域の子育て支援ボランティアにはどのような活動があればいいと思いますか。該当するものを○で囲んでください。複数選んでも結構です。

①各町内会単位で、住民による日常的な親子の居場所づくりを手伝う。

②ファミリーサポートセンター\*をつくり、提供会員になる。

③子育て支援センターで行事等の際に手伝う。

④その他( )

13. 子育て支援ボランティアに登録しようと思えますか。ひとつ選んでください。

- ①無償ならする
- ②報酬にこだわらずにする
- ③報酬があればする
- ④しない

※ファミリーサポートセンターとは

仕事と育児の両立を支援することを目的とし、育児の援助を受けたい方(依頼会員)と育児の援助を行いたい方(提供会員)からなる会員組織で、会員による一時預かりや保育園や学校への送迎など相互援助活動の調整などをアドバイザーが行います。

## 第2章 アンケートの結果と分析

今回のアンケートは、住所確認が取れている方面にて269通送付し、回収数は57通であった。

### 1. 受講生の属性

《年齢》

表1 受講生の年齢

No.	階 級	件数	% (全体)
1	40歳未満	4	7.0
2	40歳～44歳	3	5.3
3	45歳～49歳	2	3.5
4	50歳～54歳	5	8.8
5	55歳～59歳	6	10.5
6	60歳～64歳	17	29.8
7	65歳～69歳	15	26.3
8	70歳以上	5	8.8
	無回答	0	0.0
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

50歳以降から、70歳までの受講者が多いことがわかる。

《就労の状況》

表2 就労の状況

No.	階 級	件数	% (全体)
1	定年退職	14	24.6
2	専業主婦	15	26.2
3	常勤	11	19.3
4	非常勤	5	8.8
5	パートタイム	5	8.8
6	その他	6	10.5
	無回答	1	1.8
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

退職定年者、主婦で半数を占め、常勤者も20%弱参加している。

2. 子育て支援サポーター養成講座はいつ受講されましたか。複数受講された場合は全ての受講年に○をつけてください。

表3 講座受講年度

No.	階 級	件数	% (全体)
1	2004 (平成16) 年度	15	26.3
2	2005 (平成17) 年度	7	12.3
3	2006 (平成18) 年度	10	17.5
4	2007 (平成19) 年度	11	19.3
5	2008 (平成20) 年度	6	10.5
6	2009 (平成21) 年度	4	7.0
7	2010 (平成22) 年度	11	19.3
	無回答	6	10.5
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

すべての年次参加者からの回答が寄せられている。2004年度は、受講生が多かったために回答も多く寄せられたものと思われる。

表4 講座受講回数

No.	階 級	件数	% (全体)
1	1回	42	73.7
2	2回	6	10.5
3	3回	2	3.5
4	4回	1	1.8
5	5回	0	0.0
6	6回	0	0.0
7	7回	0	0.0
	無回答	6	10.5
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

複数回の受講者は16%ほどおり、3回、4回受講生も5%ほどいた。

3. 子育て支援サポーター養成講座を受けて今どのように思われていますか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

表5 講座の満足度

No.	階 級	件数	% (全体)
1	とてもよかった	15	26.3
2	よかった	23	40.3
3	ふつう	12	21.1
4	よくなかった	1	1.8

5	全くよくなかった	2	3.5
	無回答	4	7.0
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

講座の内容に関しては概ね良かったものと思われる。

4. 3で①②を選ばれた方におたずねします。どのような点がよかったですか。ご自由にお書き下さい。

表6 受講してよかったこと（自由記述複数回答）

内 容	件数
受講生同士楽しく交流できた	8
最近の子育ての現状がわかった	7
子育て支援の必要性を理解した	5
諫早市の子育て支援の現状がわかった	5
親育ての大切さ、必要性がわかった	3
受講をきっかけに活動を始められた	3
最近の母子への接し方がわかった	2
エイズ感染に関するワークショップが心に残った	2
継続して学ぶ人が多かった	1

ここでは、回答欄に自由に記入された内容を項目別に整理してまとめた。「交流しながら楽しく講座を受けられた」「最近の子育ての現状がわかった」「子育て支援の必要を理解した」「親育ての大切さ、必要性がわかった」など、我々がねらっていた講座の目標は、ほぼ達成されたと思われる。

なかでも、最終的なねらいとしていた、『受講生自身による能動的な動きを子育て支援の場に活かす』という点に関して、「受講をきっかけに活動を始められた」という受講生が3名いたことは大変うれしい結果であった。

5. 3で④⑤を選ばれた方におたずねします。どのような点がよくなかったですか。ご自由にお書き下さい。

表7 受講してよくなかったこと（自由記述複数回答）

内 容	件数
内容の趣旨がつかめなかった。	1
支援センターなので、子育て支援の看板を掲げても実際により支援をやっていないところもある。	1
活動や行事などの支援がほとんどだったこと。もっと心の支援があると思って参加したのでとても残念だった。	1
意見発表などもあったが、いまいちどのような子育てサポーターをみざしているのかよくわからなかった。	1

講座内容の趣旨がわかりにくかったこと、カウンセラー的な活動に関する学習ニーズへのミスマッチ、現状の子育て支援に対する批判、目指すべきサポーターの具体像が見えにくいなどの意見が寄せられた。これらは、講座内容の事前説明を充分に行うなど今後を活かすべき課題であろう。

6. 子育て支援サポーター養成講座は、地域での子育て支援の役に立ちましたか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

表8 講座が役に立ったか

No.	階 級	件数	% (全体)
1	とても役に立った	16	28.1
2	まあ役に立った	19	33.3
3	かわらない	11	19.3
4	役に立たなかった	6	10.5
5	まったく役に立たなかった	0	0.0
	無回答	5	8.8
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

「とても役に立った」「役に立った」という意見が約60%を占めていた。一方、かわらない、役に立たなかったという意見も、30%を占めていた。一般市民に向けた入門的な講座であるため、今回参加した退職者、主婦層には新しい有効な知識として受け入れられ、すでに子育ての現場で就労や活動をしている受講生にとっては、あまり有効な知識とならなかったものと思われる。

7. 6で①②を選ばれた方におたずねします。どんな点が役に立ちましたか。ご自由にお書き下さい。

表9 役に立ったこと（自由記述複数回答）

内 容	件数
子育て支援の基本的な考え方、知識がわかった	9
親や子どもとのかかわり方がわかった	6
自分なりに活動に関われるようになった	4
仕事や地域での役割の役に立った	4
子育て支援の存在を知れた	3
子育て支援の情報を提供できた	2
自分で活動を始められた	1
受講生同士で情報交換できた	1

ここでは、多くの受講生が「子育て支援の基本的な考え方、知識がわかった」と述べており、この講座の主なねらいは達成されたものと思われる。また、毎回講座終了後に提出していただいた

事後アンケートに、『親や子どもと実際にかかわりたい』という意見が寄せられていたため、2007年度からフィールドワークとして、諫早市内の子育て支援センター訪問を組み入れた。その結果が「親や子どもとのかかわり方がわかった」ということに繋がったのかもしれない。また、「自分なりに活動に関われるようになった」という意見は、『受講生自身による能動的な動きを子育て支援の場に活かす』という我々のねらい通りのものであった。

8. 子育て支援のためにどのような講座があれば良いと思いますか。ご自由にお書き下さい。

表10 希望する講座の内容（自由記述複数回答）

分類	内 容	件数
交流	子どもと触れあう機会	3
	若い両親のニーズ把握	3
	子どものニーズ把握	2
	保育所・幼稚園での実習	2
	子育てに病んでいる方々との交流	1
実技	遊び道具や絵本の選び方	5
	遊びの具体的な講習	4
	体のリラックス（ヨガ、アロマ、痩身など）	2
	沐浴の方法	1
	1～3歳の子どもへの子育て支援	1
	親の心、子どもの心の勉強	1
	親向け料理（キャラ弁、離乳食作りなど）	1
	子ども向け料理	1
	小物づくり（オモチャ、アクセサリなど）	1
理論	NPプログラムについて	1
	こどもの城の池田館長の話	1
	ファミリーサポートについて	1
	リスクマネジメント	1
	救急救命講習	1
	地域で活動している方々の交流	1
	支援センターでの情報交換	1
形態	平日昼間の開催	1
	定期的開催	1
対象	子育て中の親に向けたもの	3
他	保育園の事業をしっかりと監査して欲しい	1

受講生が多く要望したのは、親や子どもとの交流、子どもとの遊びや親のリラックスのための実技、自らの知識や実践力を高める理論、講座自体の形態、講座の対象、その他として保育行政に関する要望も書かれていた。これらの意見から受講生は、実践的に親や子どもと触れ合う機会を望ん

でいることが明らかになった。入門的な位置づけであった今回の講座を受講して、さらに専門性を高めたいという意欲が高まった結果を反映しているとも考えられる。

9. 地域社会全体での子育て支援は必要だと思いますか。該当するものをひとつ選んで○で囲んでください。

表11 子育て支援の必要性

No.	階 級	件数	% (全体)
1	とても必要だと思う	36	63.1
2	どちらかと言えば必要	19	33.3
3	特に必要だとは思わない	1	1.8
4	支援するべきではない	0	0.0
	無回答	1	1.8
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

ここでは、「とても必要だと思う」「どちらかと言えば必要」という答えが96%を占めており、もともと子育て支援に関心のある層が受講の申し込みをしたと仮定されるにせよ、諫早市が子育て支援総合推進モデル市町村の主要事業のテーマとして設定した、『子どもを中心において、地域福祉に対する市民の共通認識・意思統一を図り、「子どもの思い、親の責任、そして地域の役割」を理解してもらおう』という目的は、ほぼ達成されたものと思われる。その他、自由意見として下記の記述がなされていた。

《自由記述意見》

- ・小規模単位で多様性を持った子育て支援の場があればどんなにいいでしょう。
- ・子どもが少ないからこそ田舎ではママ友が必要。
- ・30年前から考えていたこと。保育所にじい・ばあの助けを借りる。子どもたちとふれあう時間を作る。昼寝のあと、家に帰るまでなど。現役の頃提案したが事故や色々なことを考えてダメの意見でした。
- ・(必要だと思う)しかし、中心があつてのサポートだと思う。
- ・お母さんも子供もノビノビ、自由に、生き生きとしておられると実感することが多い。

(記入原文まま)

各々の受講生が日頃から、親や子どもに対して何か役に立つことをしたいという、温かく意欲に満ちたまなざしを持っているということがうかが

われる。

10. 現在何かの子育て支援をなさっていますか。  
該当するものをひとつ選んで○で囲み、具体的な内容を自由にお書き下さい。

表12 子育て支援活動の状況

No.	階 級	件数	% (全体)
1	活動を行っている	37	64.9
2	活動を行っていない	20	35.1
	無回答	0	0.0
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

回答時点で活動を行っている受講生が65%を占めていた。具体的な活動内容については以下の通りである。

表13 具体的な活動内容（自由記述複数回答）

分 類	内 容	件数
地域での活動	子育てサロンやサークル開催（月1回）	9
	公民館講座等で託児（保育サポーター）	7
	地区社協の年間行事で食事、おやつ	2
	公園で母親に声掛け情報提供	2
	公民館で3歳未満児と遊ぶ（月1回）	1
	任意の会で子どもと遊ぶ（週1回）	1
	食生活改善活動	1
	幼稚園開放時に参加児のお世話	1
	通学合宿の補助	1
	子ども110番受託	1
	依頼時のみ送迎	1
	図書ボランティア	1
	小 計	28
支援センター等での活動	子育て支援センター	3
	こどもの城	1
	学童保育	1
	小 計	4
任意団体等での活動	年1、2回保育園で子どもと遊ぶ	1
	生協活動の一環	1
	小 計	2
仕事として	母子保健推進員	6
	主任児童委員	3
	子育て支援センタースタッフ	1
	保育士	1
	その他	1
	小 計	12
	合 計	46

ここでは、自由記述内容を「地域での活動」「子育て支援センター等での活動」「任意団体等での活動」「仕事として」の4項目に分類した。

「地域での活動」に参加している受講生が大変多く、これは、諫早市が諫早市社会福祉協議会に委託し地区社協と連携してすすめていた、「諫早市子育て支援委員会」の成果ではないと思われる。

この活動は、中学校区を中心とした15か所を日常生活圏域と定め、全ての地域に「諫早市子育て支援委員会」を設置し、地域の子育て支援関係者（民生委員児童委員、保健師、保育士、子ども会、PTA、自治会、健全育成会、少年補導員、学校など）が、“地域の子どもは地域で育てる”「わが地域は子どもに何を教えようとしているのか」を共通認識として、情報を共有化し、地域行事（伝統行事、保育園・学校行事、子ども会・PTA行事等）の再確認を行うようにしてきたものである。この事業が地域での活動を生みだし今回の結果となって表れたのではないだろうか<sup>3</sup>。

保育サポーターは、シルバー人材センターに登録し有償で子どもを保育するものであり、本講座がスタートしたばかりのころは、就労の機会を得られることを期待して、その登録者も数名受講していたようである。

また、基本的にボランティアではあるが、「仕事」のカテゴリーに入れている民生児童委員および主任児童委員による回答では、地域の活動に積極的に関わっている記述がみられた。問10で「活動している」と回答した37名の受講生は、平均してひとり1.2件の活動を行うなど全体的に意欲の高さがうかがえた。なお、活動をしていないと答えた受講生の自由記述欄には以下のような回答が寄せられていた。

- ・ボランティア活動のため
- ・何ができるか誰に尋ねていいのかわからなかったから。
- ・仕事を探していた。
- ・(いままでしていた活動の) 子どもが減り、参加者がいなくなった。
- ・子育てにつながる情報に接していない。
- ・孫に関わっている。
- ・退職したばかり。
- ・何かしたいが、どのような活動があるのかわからない。
- ・家族の面倒をみている。(子ども、高齢者)
- ・仕事をしている。

- ・やりたい活動（心の面のサポート）を実施しているところがない。
- ・忙しい

活動ができない理由は、仕事や子育て支援以外のボランティアへの参加、親族のサポート、健康上の理由などさまざま考えられるが、「何ができるか誰に尋ねていいのかわからなかったから。」「子育てにつながる情報に接していない。」「何かしたいが、どのような活動があるのかわからない。」という回答に関しては、行政サイドからの情報提供が市民に行き届いていなかったことも考えられ、今後の検討が必要と思われる。

11. 子育て支援ボランティアへの報酬についてどのようにお考えですか。該当するものをひとつ選び、理由と①を選ばれた場合は、妥当な金額と内訳（時給〇〇円、交通費〇〇円など）をお書き下さい。

表14 ボランティア報酬についての考え

No.	階 級	件数	% (全体)
1	あったほうがよい	23	40.3
2	ないほうがよい	9	15.8
3	どちらでもよい	18	31.6
	無回答	7	12.3
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

報酬があったほうがよいという意見は、全体の40%を占め、どちらでもよいも加えると70%を超える受講生が報酬については否定をしなかった。その理由については以下の通りである。

表15 報酬があったほうがよい理由（自由記述複数回答）

内 容	件数	備 考
交通費として	7	1日1,000円程度
責任感・義務感・積極的な気持ちが維持できる	6	
高齢者・未就労者は助かる	1	
気持ち的に、お茶の時のおやつという感覚	1	
個人的な持ち出しに限界がある	1	
家族の理解が得やすい	1	
当然のことと思う	1	

ここでは、交通費としての報酬を望む声が多かった。また、報酬を得ることにより活動を継続する気持ちが維持できるという意見も複数見られた。年金生活に入っている退職者や主婦の参加が

多い現状を考えると、「助かる」という意見は納得させられるものがある。

一方「報酬がない方がよい」「報酬はどちらでもよい」とした受講生の意見は、以下の通りとなっている。

《報酬はいらない》

- ・ボランティアだから見返りは求めないと理解している。
- ・報酬があると仕事の受け取り方になる。
- ・報酬にはそれなりの専門的な知識などが求められ、仕事になる。

《どちらでもよい》

- ・ボランティアというからには無償というのが根底にある。お金が絡むのであればサポーターとか呼称を変えるとよいかと思います。
- ・「ボランティア」の実際の内容による。
- ・あったとすれば旅費程度でよい。
- ・ボランティアと割り切って活動をしている。
- ・よかったら、油代をもらえたらいいな!と思うこともある。
- ・参加出来ない時ひどく負担に感じるので。
- ・(支払うお金があるのであれば)教材等の資金に充てるべし。
- ・報酬があれば責任がついてくるので、気持ちが重くなると思う。その反面報酬があれば「生きがい」につながる気もする。でも、ボランティアは「無功德」ですよ。
- ・必要に応じてあった方がよい。ない方がよいになります。あくまでボランティアですから…。

この回答で共通することは、受講生が「ボランティアとは無償の奉仕である」と認識している場合、報酬を得ることに抵抗を感じている姿である。それと同時に、報酬を得ると活動に対して義務を感じ、それが負担になるという心理がみられる。

報酬として期待されるのは、せいぜい交通費程度であり、交通費の持ち出しという経済的負担が活動への意欲を低下させる場合と、報酬の受領が心理的な負担となり活動への意欲が低下する場合が想定され、いずれにしても、事前に一定の条件を明確にし、その条件を理解した参加者を募るといった方法がよいと思われる。

12. 地域の子育て支援ボランティアにはどのような活動があればいいと思いますか。該当するものを○で囲んでください。複数選んでいた



だいても結構です。

表16 子育て支援ボランティア活動への希望

No.	階 級	件数	% (全体)
1	各町内会での親子の居場所づくり	24	42.1
2	ファミリーサポートセンターの提供会員になる	26	45.6
3	子育て支援センターでの手伝い	33	57.9
4	その他	3	5.3
	無回答	6	10.5
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

ここでは、「子育て支援センターでの手伝い」という答えが58%に上った。講座のフィールドワークとして訪問したこともあり、具体的な活動内容が理解しやすかったのではないと思われる。また、地域密着型の町内会での活動にも、高い関心がうかがわれた。ただ残念なことに、地区社協による中学校区単位での子育て支援事業は全市的には行き渡っておらず、一部の地域のみで実施にとどまっている。行政と市民の協働による子育て支援として地域でどのような受け入れ方ができるのか、今後の大きな課題となる。

また、現在諫早市では実施されていないファミリーサポートに関する関心も高く、提供会員登録への潜在的ニーズも低くはない。利用会員登録のニーズが一定程度あれば、事業化への具体的な検討も可能になるものと思われる。

地域の子育て支援ボランティアにはどのような活動があればいいかについての自由記述回答は以下の通りである。

- ・お母さんが講演を聞きたい時など一時的に子守を手伝うなど。
- ・保育サポーターとして個々に活動しているので、やはりファミリーサポートセンターは、利用する人(依頼者)や、保育サポーターをつなげる役割としてとても必要だと思います。
- ・病児保育、ホリデー保育
- ・子育て中の側から要望があつての活動することと思う。「はい出ていますどうぞ来てください」と待ってやるものじゃないでしょう。
- ・保育所にじい・ばあへの助けを借りる。子どもたちとふれあう時間を作る。昼寝のあと、家に帰るまでなど。現役の頃提案したように、日常的にサポート出来たら、先生方も喜ぶかな～。※老人ホームの方に、日にちを決めて遊びに来てもらうなど(元気な方)

- ・今、おいの子を保育園送迎と夜当番の時預かりを行っているが、親子にはないふれあい、しつけ、遊びなどができ、お互いに楽しんでいる。近所にそんなおばあちゃんみたいな存在があったら地域の交流がもっと深くなるのでは。
- ・子育て支援のボランティアの活動、現在どういふ活動されているのかわからない。また、親子さんも必要とされているのか？現状が把握できていない(私自身)
- ・子育てについての悩みや学びなど内面的な部分のサポートが必要だと思います。例えば家庭教育講座などを定期的に行う。

ここでも、ファミリーサポート的な支援の仕組みへの記述がみられた。また現在の子育て支援サービスが、当事者のニーズを踏まえたものであるかどうかについて懐疑的な意見もあった。これは、当事者の声を基にした地域の実情に合ったサービスの確立と、利用者と支援者をつなぐマネジメントが身近に感じられていないという現状を反映しているのではないだろうか。いずれにしても、親子と志のある市民をつなぐ、諫早市の子育て支援の中心となる場所や人材が必要な時期を迎えているものと思われる。

13. 子育て支援ボランティアに登録しようと思いますか。ひとつ選んでください。

表17 子育て支援ボランティアの登録希望の有無

No.	階 級	件数	% (全体)
1	無償ならする	3	5.3
2	報酬にこだわらずにする	27	47.3
3	報酬があればする	2	3.5
4	しない	18	31.6
5	①～④以外	0	0.0
	無回答	7	12.3
	サンプル数 (%ベース)	57	100.0

ここでいう「子育て支援ボランティア」とは、これまでの講座を通してひとつの課題であった受講生の受け皿として、諫早市中央保育所に併設する子育て支援センターが、おもに5歳までの子どもをもち、在宅で子育てをしている親を対象に実施するNPプログラム開催時の託児支援を目的に創設したものである。

回答者の53%にあたる30人が、報酬の有無にかかわらず子育て支援ボランティアに登録をすると答えた。また、「しない」と回答したなかには、「無

償ならすが現在は無理かと思う。(時間的に)民生児童委員と地区の子育てサロン、いきいきサロンのボランティア等をやっている。」という記述があり、消極的な選択ではなく、すでに積極的に子育て支援に参加しているがための選択というケースもみられた。

### 第3章 諫早市子育て支援サポーター養成講座の成果

日本では、第二次世界大戦終結後からしばらくの間、あまり高いとはいえなかった人権意識のもと、国民の福祉は行政にお任せの時代が長く続き、自分で考えなくても自分で行動しなくても、困った時は家族や親せき、行政がなんとかしてくれるという、担保のない安心にすがることができた時代が続いた。しかしこの20年に、地域も人のところも大きく様変わりし、他者のためにところを砕く余裕は奪われ、虐待や不適切な養育等により、将来を託す子ども達に大きなしわ寄せが及ぶようになった。

すがっていた安心に担保がなかった事が明らかになった今、市民の一人ひとりが、その持てる力に気付き、地域で活かし、行政とともに地域を支え、自分が暮らしている地域を誰もが安心して暮らせる場へと発展させることが求められている。

これまでの諫早市子育て支援サポーター養成講座の主たる受講者は、50代後半から60代の女性たちであった。この年代の女性たちは、まさに日本各地でボランティアや市民活動を支えてきた層ではあるが、男女差別が公然とまかり通っていた頃に幼少期を過ごしてきた年代でもある。そのために、女性として人前で自分の思いや意見を自由に話すということを苦手とするという傾向は強い。とりわけ、大人数の場ではなかなか自分の意見を話す事は難しく、一人ひとりの個性やさまざまな能力を発揮するに至らないまま、子育て支援への思いだけをもち、参画には至らないというケースが多かったのではないだろうか。

そこで我々は、この講座の受講生一人ひとりが、地域の子育て環境の状況やそこで生じている問題を理解したうえで、状況を変えるために自身の持てる力を地域で発揮できるようなアプローチを試みた。その多くは、グループワークによるもので、少人数で他の参加者と語り考え、課題解決にむけた共同作業を通して体験型学習をすすめるというワークショップ形式を多く取り入れた。また、アサーティブなコミュニケーションに関する内容も

取り入れ、受講生が講座を安心安全な場として認識し、講座以外の場所でも他者と対等な関係性を大切にして、なるべく自己開示が出来るような環境を整えることにも配慮した。

今回のアンケートはこの様な我々の実践を問われるものでもあったが、概ね以下のような項目に関して理解を深めてもらいつつ、幾つかの成果を上げることができたのではないだろうか。

- ・これまで私的な事と考えられてきた「子育て」に、地域ぐるみの支援が必要。
- ・孤立した子育て環境の中では、子どものところが育ちにくいという事実。
- ・孤立した子育てを防ぐための、子どもを育てている保護者の保護の重要性。
- ・子育て支援は、行政と市民が協働して担っていくものであるという認識。

受講生に対するおもな成果としては次のように考える<sup>4</sup>。

- ①グループワークを中心とした参加型の講座で、受講生各自が積極的に発言し、他者と交流する力を一層引き上げることができた。
- ②学びのなかで参加者同士が交流を深め、そこで多くの刺激を受けて自分で活動を始めた人もいれば、既存の活動に積極的に関わり始めた人もいた。
- ③受講生の学びの意欲が向上し、新しい講座の内容についても主体的・積極的に考えるようになった。

また諫早市に対しては、具体的かつ有効な親支援策のひとつとして認識されていたNPプログラムを、講座受講生のみならず、諫早市内の幾つかの私立保育所の関係者にも紹介し、さらに諫早市の委託を受けてファシリテーター養成講座を開催し、子育て支援サポーター養成講座受講生を、NPプログラム開催時の子育て支援ボランティアとして登録する基礎を作ることが出来たことは、大きな意味があったと考える。

### おわりに 地域における子育て支援ボランティア養成の課題

子育て支援の最終的なねらいは、親の負担軽減ではなく、親の負担を軽減して、親が子どもにゆとりを持って接する環境を整え、子どものところ

とからだを育める養育環境を整えることにある。そのためにも、親自身があるがままの自分を受け入れ、子どもを受け入れ、子育てが楽しめるように支援し、子どもが地域の多様な人びととの関わりあいのなかで成長できる場をつくる事が大切である。この関わりあいの場を、地域の創意工夫で作りに出すことができるかどうか、これからの子育て支援の重要な課題である。言い換えれば、人間開発と言う視点で住民が学ぶ場や機会を維持し進展させることを要として、地域全体を子育て支援を起点に、ハード面、ソフト面で底上げしながら、高齢化の問題にも対応できる支えあう地域として発展させることが求められているのである。

そのためにも、これから中央保育所子育て支援センターが中心となった、子育て支援サポーター養成講座の継続的な開催や、「いさはや子育て応援プラン」後期計画に基づき地域に密着した循環型の子育て支援モデルが構築され、父親や地域の男性の子育て支援への参画促進、これから親になる大学生や高校生への効果的なアプローチが模索されることを切に願う。

さらに言えば、かつて諫早市が地域全体を巻き込んだ身近な子育て支援の場として、地区社協とともに活動の場を広げようとしていた『子育て支援委員会』を再興し、支えあう地域づくりの強固な基盤とされることを心から願っている。

#### 註

- <sup>1</sup> 講座の経緯と詳細に関しては、以下の論文を参照  
『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要第10号』「地域における子育て支援ボランティア養成のあり方に関する一考察 ～諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に～」菅原良子・入江詩子 2011」
- <sup>2</sup> 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要第10号』「地域における子育て支援ボランティア養成のあり方に関する一考察 ～諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に～」菅原良子・入江詩子 2011」
- <sup>3</sup> 真津山地区社会福祉協議会では、平成9年から活動をすすめ、平成13年度より諫早市社会福祉協議会からモデル地区の指定を受けて地域に根差した優れた実践を進めてきた。内閣府の報告書『子育てを支える「家族・地域のきずな」を深める先進的取組事例調査』平成20年3月でも取り上げられている。

- <sup>4</sup> 『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要第10号』「地域における子育て支援ボランティア養成のあり方に関する一考察 ～諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に～」菅原良子・入江詩子 2011」

#### 参考・引用文献

- 『平成21年度 諫早市子育て支援サポーター養成講座報告書』長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所  
『子育ての環境学』大日向雅美・荘巖舜哉編 大修館書店 2005  
『地域子育ての環境づくり』大日向雅美編 ぎょうせい 2008  
『子育て・しつけ』広田照幸編 日本図書センター 2006  
『100人のおばちゃん見つけ！みんなで子育てまちづくり』丹羽洋子 ひとなる書房 2008  
「子育て支援の展開とまちづくりの関連について」吉田ゆり  
京都女子大学現代社会研究科『現代社会研究科論集』第3号 研究ノート 2009  
『子育てを支える「家族・地域のきずな」を深める先進的取組事例調査』内閣府 平成20年3月